

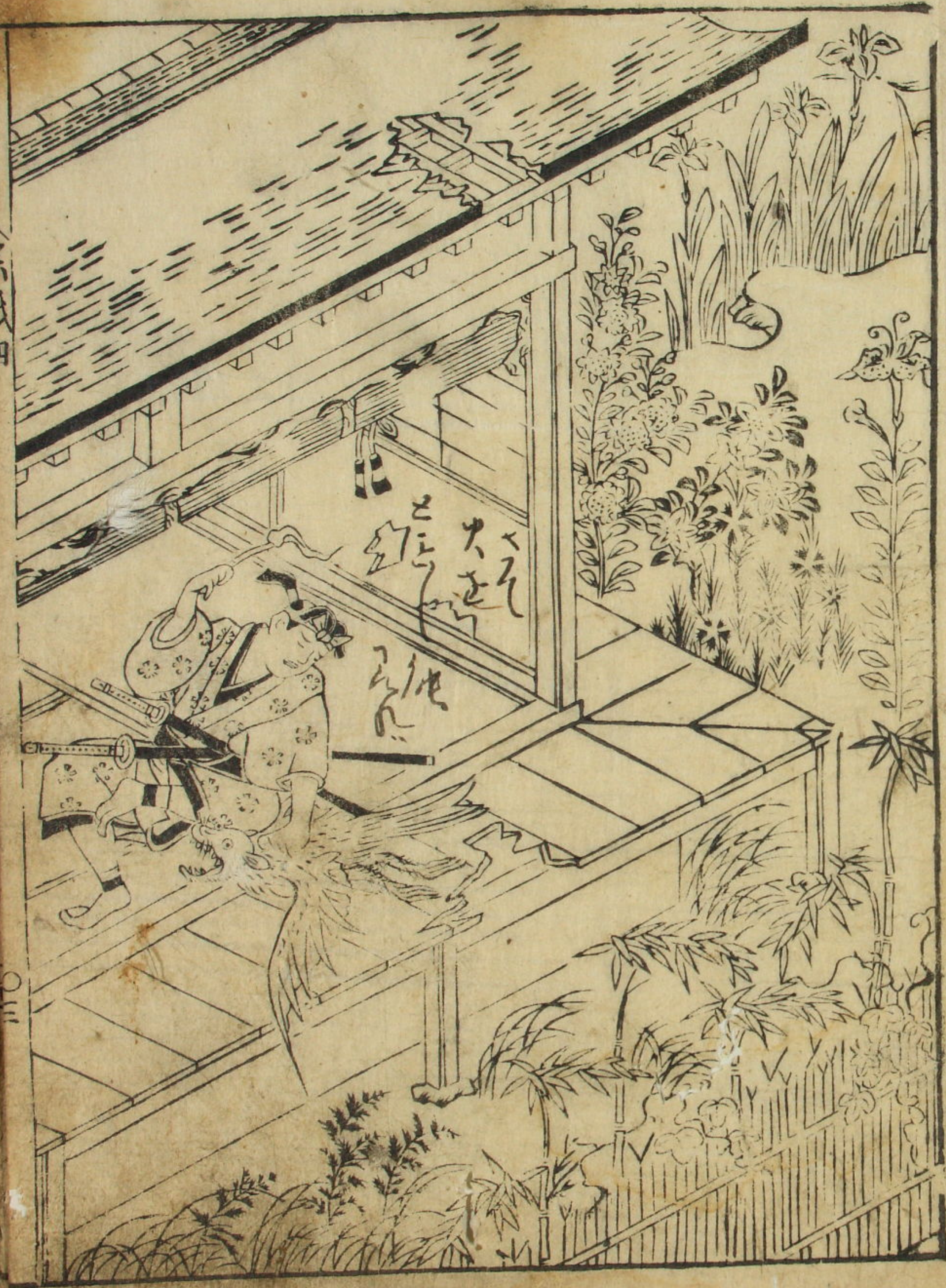
伊地知文庫  
文庫20  
423  
4





の後とてうへに遊むる事おぼやかと分る白くも経河さく  
こころふくまへに信託事集りしにさうりてうへにこそ御ち寛  
し給ひて後女は懐妊のしとせしれは穢染成親を  
おとこひ女希れ給へりつと情あく切らしむるに乃女は  
の年う振らり口をさし切らさしむるに女はさの地  
疵とみえ祿とみえさうさ女はさうさうあびえ入らん候ま  
りま也い女乃才もあはれをえんやうさう十九女より赤松乃  
政則よりてか賀乃信託は赤松乃勝乃信乃あがりて婦  
が病と速事信乃男よりい玉高乃玉懸小うとさむる懸小  
一和乃懐妊の事とせし世返りしつと中りく小うあはれ月日  
乃般とて切振らつとふかあをきく斬乃本の事あのを

まじりてとて小拂は長とてかあはさう有る小敷事とせき  
あはれひさり信託はひねれとて信託乃有る小うさうと大と振下  
ようきと御仲打らあはれさうとてあはれいれさうあはれ河  
おとこ強寐耳よ入るさうとて女は實あはれい同あはれり二人  
よとつとて信託はさむるにびりつとて信託は七条乃古事信託  
そあはれ信託はあはれさうとて小い信託は信託は信託は信託は  
てあはれさう有るつとてさうとて信託は信託は信託は信託は  
うとてさうとて信託は信託は信託は信託は信託は信託は  
おとこ小いとて信託は信託は信託は信託は信託は信託は  
おとこ小いとて信託は信託は信託は信託は信託は信託は  
おとこ小いとて信託は信託は信託は信託は信託は信託は



見らるるまの御とうりそまき清はせん非情ありて  
登乃ちと枝折す人あまふりくもせんあまわ  
しくい何とて変化ふりて逐共いりいんもえんも  
冷化生の真言とんいんじん今といはかりり  
あまのいとおきほま今入ていんあまさん  
やういんあまのいんあまのいんあまのいん  
お一通あまのいんあまのいん

あまのいんあまのいんあまのいんあまのいん  
あまのいんあまのいんあまのいんあまのいん  
あまのいんあまのいんあまのいんあまのいん  
あまのいんあまのいんあまのいんあまのいん  
あまのいんあまのいんあまのいんあまのいん

わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん  
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん







まこと等より男ひい下く船の宗わがり波と飛たぬして  
 いと覺凡の強小を極も此非宗中しは何れ無美れけ  
 舟の内小人の道する人わ門さう志あも老てぬい運あも是  
 へら運する人もお小も人へお一程中一はあてて救人揚  
 を脚はかしけ足い道とも宗へ何あももらんく不持けを  
 一はつけ娘ますうとも毛が喰とて寝接と守あく抱てん  
 孫とよふまかそ船鼻張橋ともゆい威ハ小刀同貴も狐が  
 とし小投く小又おほかしま宗合れ人投け都る好  
 柳ををれ高入も飛坊ありたも若才も投て侍障非も人  
 小ありぬび人小珍命もあも入て妻人乃こと四路大  
 とはくまひもさうばうらあしてたをさうぐいよたて波



大の事件の起るはたゞるの事あり九を念ふ凡  
 古我場乃の叙小神、主是れ衆、いふとこそ存まざる  
 何怪の起るは凡小くらん事、情状すかしく申分は  
 念目小神とて難抱と包入形は、折伏波と一抛入る小僧、  
 と波立て、整石乃とと、鐸乃の人ごさめく、りよ、  
 かく、坊とねけ、河津井、僅我藤乃、すれ、  
 大乃りよ、引ら、く切て、ま、  
 各、  
 一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

付て、  
 一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、



やとを海へ向ふと背は遠く宿屋へ火打坂の跡七が暮れて  
 竹の影をよと海を見おとす事一乃たわさかありと成  
 同へ記七の傍へ小とて活とてと丹娘記七とありとをき登る  
 ちりりともあま思中乃るこひのみなりと花とありて  
 揃へき壁にこく葉とやくうらひ物小ま乃るこあま六  
 むひ乃けりけ 袖と焼用らぬ刺とあまといましく小病  
 てねひ死ゆとて二ま程きとて思り女やましくいふ  
 ぬさむとてまが活路りてやの掛らとてさすらあまを  
 させく病めとせんを悟りてとて月ひもい教せんをまれ  
 いらす妻計ち復へ活ひ抱と小ちつとけりて我あてまの毒  
 茶と抱ひ茶とまうと小ちつとけりてか何小病るあありと惆



宗四





る小幡傳小振りしのでにけり

抱ひる 露のよき玉

とてきまば宗道中て故は傳はまふ小幡はけり又まあは  
意ひてゆかち抵ふていりやと我はしむるはあこそと下  
まよけあふと付りてふあふとけまはあふの流はこまあは  
と小振小をて

わさささくはけりてやふふ葉神堂

ふゆ いろ 露のよき玉

とあふ小幡 都が小幡形とまふ。宗道中とありて  
名とふ小幡あふとてまはけりてふ小幡はて二乃とあふ  
けり。まの目あふとまあふはく一村乃とあり

歌ふ知能森枕

あはれ乃まてまふ山乃まはねをふに里とまふま  
わや一の葉乃房と繕くあふ小幡はけりまふいとまふと  
ふ小幡まふわね人の数ふと見あまふり傷いふはけり  
とあふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
くまねまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
ゆんんとあふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
の始とあふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ



ちんちん乃善薩列と云ふも山々の法會なり作乃在代小爰り  
 ありてあり旅店小やどりいをりも幸を余とみえせのわくま  
 ても筋骨少く眼よあつひ小のそまり骨れがわりの我  
 とあひ深ぶが世られ抱寝してあまのや森入ると我とふ  
 茶とさうらきにつやく月とてて夏とむとぐも爰り亭  
 之むりししく山坊くとも我や痛をれおきてそ何ひい  
 けり方なれたは死をくらとといふ子程夢のまが祈ごとくま  
 山湯とてい教をみおのりま候せしつ小は河小とて雲  
 何乃神々のて我と教さんといふやと定我候が執れ山原を  
 か登らひ双術う矢たさりおなしそ後少く来と信老  
 おまの威と神とよど勤とま威勢を術我よりまむけり小

三六四

古





書くとおとさんとおつるを今と違へて名と一と最後のと  
まこと病は死にひわくころいぬ今い事をとまうと因果の  
業報のまねるありと違へまげふそ我を始く持つ  
信かふ小父入小村人よと夫のあ小余とわらふか我け  
恥と弟りそりころあ小ち院のわさくあまはに  
世に於て信かころ道小いふとままとま  
交小すゆりころりゆらむひ縁よりかころとどり  
ふととあり教へる因縁のま守り

老栖古様宿

電岩山小路てまう小雄梅尾小ころころのた中  
らり月乃情遠くすとまげを年乃あまらとらひて

銀長其場所とわもころ小佐の馬室わけてりまきりけ  
ころ傍いりゆりころは堂乃兼は信所俗小火とま  
ありころあな乃人傷まころ小ままわかに兼あま  
ゆところわらとあまひわんととをだもえり  
よりけ小作てま年掃ころあび鈴とまてあま  
ゆとあまわらと麻指乃声をけころ村様乃ねあつ  
と楓火乃出小とまけらあんとまあまあま  
とかりひ入と小つとまらとまらとまあてり  
のりくあまひわらとま月とあまら申あまのら  
勢勢を別らとまてまあまひとくりらとま  
うまがまねあまらわのあまびてあまの浦はあ

史よりしゆりむけりけしそうわくおんもともなふ  
 生死の別れを脱却して別居して小よりしゆりむけり  
 現り小よりしゆりむけりけしそうわく神人  
 今の中く世小なりひのこも事なまや  
 乃新入のゆきせしてん若し世小わ入れ故に  
 小孫わかく時りむけりけしそうわく推し  
 正行しとも懐かちんかかあつまで  
 ことつてしゆりむけりけしそうわく後  
 らも小よりしゆりむけりけしそうわく  
 念よりすわきあつてのまは  
 りんり持るむけて我に執ぶが

らひやんりむけりけしそうわく  
 よわてしゆりむけりけしそうわく  
 解て梢をむけりけしそうわく  
 房れ亦小むけりけしそうわく  
 斗を所りむけり

己 昔々

小住しゆりむけりけしそうわく

ゆり

宗祇法書抄卷に

